

五人土籠御書

文永八年一〇月三日 五〇歳

今月七日さ^{佐渡}どの国へま^籠かるなり。各々は法華經一部づゝあそばして候へば、我が身並びに父母・兄弟、存亡等に回向しまし^寒し候らん。今夜のかんずるにつけて、いよいよ我が身より心くるしさ申すばかりなし。ろうをいでさせ給ひなば、明年のはるかならずきたり給へ。み^見ゝへまいらすべし。せうどのゝ但一人あるやつをつけよか^思しとをもう心、心なしとをもう人一人もなければ、しぬまで各々御はぢなり。又大進阿闍梨はこれにさたすべき事^{方方}かたがたあり。又を^{各各}のをのゝ御身の上をも、み^見はて^果せんがれうにとゞめ^{料留置}をくなり。くは^詳しくは申し候はんずらん。恐々謹言。

十月三日

日 蓮 花 押

五 人 御 中

せんあくてご房をばつけさせ給へ。又し^{四郎奴}らうめが一人あらんずるが、ふ^{不便}びんに候へば申す。